

塩谷郡市医師会だより

Contents

- 1 平成28年度第3回役員会報告
- 2 第12回塩谷郡市医師会市民公開講座報告
- 3 学術講演会報告
- 4 シリーズ「塩谷医療史」19

一般社団法人 塩谷郡市医師会
広報委員会

〒329-1312

さくら市桜野1319番地3

さくら市氏家保健センター内

TEL 028(682)3518

FAX 028(682)5760

平成28年度第3回役員会報告

平成28年10月17日(月)午後7時から医師会事務室で開催された。

出席者：岡会長、尾形副会長、阿久津副会長、佐藤会計担当理事、軽部理事、半田理事、仲嶋理事、植木理事、高橋理事、手塚理事、嶋尾理事、村井(信)監事、森島監事



1. 在宅医療連携拠点整備促進事業について・・・関連事業に積極参加すること。2016年10月28日(金)午後7時から8時30分、さくら市氏家保健センターで、山口クリニック院長山口多鶴子先生による「訪問診療はじめませんか」という講演会があるのでできるだけ多くの参加をお願いします。

2. 市民公開講座について・・・11月6日(日)13時～15時に、塩谷町塩谷中学校アリーナにて開催される。講師は水ジャーナリストの橋本淳司氏による「おいしい水と健康」多数の参加をお願いします。来年度は矢板市で開催される予定。

3. 郡市大学医師会正副会長会議について・・・平成28年11月19日(土)、下都賀郡市医師会主催で、会議の議題は、在宅医療について話し合われる予定。

4. その他 なし

5. 報告事項

(1) 医療安全対策委員会・・・7月7日(木)に開催された。紛争処理の事例は横ばいの状況。栃木県全体とし

ては平成27年度は36件。毎年十数件の医療事故が起きている。医療事故が起こった場合は顧問弁護士のいる県医師会に報告して欲しい。

(2) 栃木県・さくら市総合防災訓練・・・8月28日(日)総合運動公園で開催された。県全体の防災訓練で、約1500人の参加があった。へりも3機参加。岡会長、手塚理事、阿久津副会長が参加。来年は大田原市で開催される。今後は会員の先生方にも多数出席して頂きたい。

(3) 関東甲信越静学校医協議会・・・関東ブロックの県医師会が持ち回りで担当している。今回は栃木県が担当。今年から始まった運動器検診について話し合いがあった。

(4) 在宅医療連携促進加速化検討会・・・尾形副会長から報告、「どこでも連絡帳」を県医師会が推し進めている。一人の患者さんを中心に一つのグループをつくり情報を共有する。現状は余り活用されていない。

(5) 救急資器材に関するアンケート結果・・・塩谷郡市医師会の87%の回収率。AEDは、90%以上は設置されている。

(6) 医療機関に退蔵されている水銀血圧計などの回収作業について(報告)・・・水俣条約お呼び水銀汚染防止法等により、水銀血圧計、水銀体温計は、製造と輸出が禁止になり、各医療機関から、9月1日から15日に回収した。

(7) 岡会長から「しおやの医療史」企画展が、さくら市ミュージアムにて、11月11日～12月18日にかけて開催されているので奮って参加するように報告があった。

(8) 学校健康診断の運動器検診・・・栃木県医師会長島公之常任理事の話が報告された。

(9) 宇医会報 理事の独り言・・・外来管理加算、特定疾患療養管理料は、規定どおりカルテに記載した場合にかぎり算定できることを確認。

6. 栃木県医師連盟塩谷郡市支部会議

栃木県知事選挙について・・・県医師会からは、福田富一推薦。塩谷郡医師連盟としては、塩谷町の指定廃棄物最終処分場のことがあり、推薦しないということになった。

塩谷郡市医師会ホームページ/メール	広報委員会編集部	医師会事務局
URL http://www.tochigi-med.or.jp/shioya/ メール shioya@tochigi-med.or.jp	高橋雄二 uppaship@fa2.so-net.ne.jp	糸川 kumekawa.shioya@gmail.com 高橋 takahashi@e-shioya.jp

第12回塩谷郡市医師会市民公開講座報告

開催日時：平成28年11月6日(日)PM1:00～3:00

場所：塩谷町 塩谷中アリーナ

ご来場者数：200人 スタッフ:45名



当日は、晴天に恵まれた秋の紅葉シーズンでもあり、また、各地で色々なイベントがある中で、200名のご来場をいただきました。

今回の市民公開講座は、塩谷町の医師会が中心となり、企画段階において地元高原山を水源とした水をテーマに「自然の美しい水が人の健康に貢献する」と題した講演とし、



塩谷町の水道水が全国5位の順位を唱えたTVやラジオでお馴染みの水ジャーナリスト橋本淳司先生をお招きする事と、同じ高原山の水源を利用して地元塩谷町で有機栽培農業に取り組んでいる杉山農場の杉山修一先生にご講演をお願いして開催することが計画されました。

今回の司会は、フリーアナウンサーの中野知美(とろろ)さんをお願いして、午後1時にベルの合図で始まり、主催者代表の岡一雄会長の挨拶の後、ご来賓の矢板市長齋藤淳一郎様のご祝辞をいただきました。

午後1時10分に第1部講演杉山農場杉山修一先生は、ご自身がひどいアトピーに悩まされ、たどり着いた無農薬栽培の有機農業に目覚め、周囲の環境や自然生態系の維持と改善に努め農産物の食としての安全性を確保する努力を重ねてきたとのこと。無農薬により小さな生物と共存しながらの農業が安心安全な食物に繋がり我々の健康を維持していく事になると強いメッセージを発信しておりました。

こうした中で、栽培された大豆から作られた豆腐が最近全国一位となったそうで、ご来場者全員が試食させていただきましたが、こんなに甘みを感じさせて

くれる豆腐は初めての経験でした。



午後2時から、水ジャーナリスト橋本淳司先生の基調講演となりました。世界中を巡って水問題を調査した経験談には驚くべき話もありました。ヒ素の混じった水を飲んで死人が出ている地域があるそうです。そこは良質の水を汲みに行くためには毎日20キロの道をりを往復しなければならないためにやむを得ずヒ素交じりの水を飲んでいるとの事、良質な水に恵まれた日本に住んでなんて幸せな事か。全国的に地下水の減少がみられ、森林伐採や上流でのペットボトル水メーカーによる取水や減反政策による田んぼの減少などが原因として上げられるそうです。我々は「100年後の水を守る!!」を合言葉に、地元流域の水保全の意識を持って貴重な水を守り後世に引き継いでいかなければならないと訴えておられ、考えさせられるご講演であり、改めて水に関心が持て貴重であることを認識させられました。

2名の講師による講演が終わり、塩谷町医師会長の植木雅人先生から閉会の挨拶をもって無事終了する事ができました。

ご来場いただいた方々、そして準備に携わった方々、当日休みにも係らず応援していただいた方々に感謝申し上げます。

学術講演会 I

「小児整形外科疾患の診断と治療～側弯症を中心に～」

日時：平成28年5月17日(火)

講師：自治医科大学 とちぎ子ども医療センター

小児整形外科 講師 渡邊 英明 先生



側弯症の発見は運動器検診の一番大切な目的です。Cobb角が20度までは側齊状態といい、経過観察します。20度以上を側弯症といい、装具療法や手術の検討をします。装具療法の効果は不確かで、70%の医療機関ではやっていません。手術は可動域が激減するため、見映えはいいですが、生活に支障がでて、逆にADLが悪化するため安易にはできません。早期発見しても有効な治療法が無く、親子への精神的フォローが一番重要な厄介な疾患です。(半田 教)

学術講演会II

「便秘症を考える」

日時：平成28年6月21日(火)

講師：黒須病院 副院長 民上 英俊 先生

黒須病院外科、民上英俊副院長から便秘についてのご講演をいただきました。便秘の診断基準ははっきりと定義されておらず、3日以上排便がない状態や排便間隔が不規則、便が硬く残便感がある等の臨床症状を元に診断しているという現状です。



便秘症患者は内科にとどまらず、小児科、産婦人科、整形外科等多科にわたり来院され投薬治療が行われています。従来は刺激性下剤(プルゼニド、センノサイド等)や緩下剤(酸化マグネシウム、マグミット等)を組み合わせコントロールされていました。近年ではルビプロストン(アミティーザ)等、作用機序の異なる薬も開発されており選択の幅も広がっています。たかが便秘と思っても、大腸ポリープや大腸がん、肛門疾患との鑑別が必要な場合もあるので、長期にわたる便秘の患者に対しては大腸検査等の必要性も鑑み慎重に診療していかないと感じた講演でした。(根本祐太)

学術講演会III

「酸関連疾患とH. P. 除菌」

～塩谷郡市エリア胃がんリスク検診～

日時：平成28年7月22日(金)

講師：花塚クリニック 院長 花塚 和伸 先生



日本のがんの動向、胃がん健診のこれまでの経緯、今年から胃がん検診に内視鏡検診が認められたこと、胃がんとピロリ菌感染についての話があった。2014年度より塩谷郡市医師会でも胃がんリスク検診が始まり、1年半での結果。受診者数は1347名(11.6%、対象11618名)であった。胃がん発見数は胃がんリスク検診からは10名、従来のバリウム検診からは9名(受診者数7841名)、発見率は胃がんリスク検診が6.7倍高かった。しかし二次精査受診が34.2%と

低く、またその後の内視鏡再検査率が十分でなく、今後の課題として残る。胃酸分泌、除菌に対してのボノプラザンの成績発表あり。除菌率が93.5%と良好な成績であった。また、除菌後の胃がん発生の危険が残る事、内視鏡での経過観察で見つかった症例と内視鏡治療についても動画を使った発表があった。(編集部)

学術講演会IV

「SGLT2阻害薬をいかに使いこなすか」

日時：平成28年9月13日(火)

講師：自治医科大学 内分泌代謝学部門



講師 岡田 健太 先生
岡田先生は、SGLT2阻害薬が大規模臨床試験において心血管イベントや心血管死を有意に抑制し、懸念された副作用もプラセボと同様であったことから、特に内臓脂肪の多い肥満合併2型糖

尿症例に対して有効な薬剤であることを示された。また、様々な症例を呈示され、HbA1cのみに着目するのではなく、血糖変動幅を小さくすること、低血糖を見逃さないことなど糖尿病管理のポイントを教えていただき有意義な講演会であった。(橋本 敬)

学術講演会V

「大腸がんで死なないために」～こんなに多い大腸がん死亡者数～

日時：平成28年10月11日(火)

講師：栃木県立がんセンター

大腸骨盤外科 小澤 平太 先生

今回の講演会は、栃木県立がんセンターとの共催で行われた。大腸がんは、がん部位別死亡率で男性では肺がん、胃がん



に次いで3位、女性では1位であり、増加傾向にある。小澤先生は、大腸がんの危険因子と予防、大腸内視鏡による大腸がん検診の重要性について大変わかりやすく説明された。さらに、栃木県立がんセンターで行われている腹腔鏡下での手術を動画を交えて解説された。講演会には菱沼病院長も出席され、次回は最近話題の乳がんについての講演会を行う予定であることが告げられた。

(岡 一雄)

『解体新書』～塩谷地区との意外な接点～

日本の蘭学の隆盛をおこし、さらには近代医学が定着する素地を作った事件は解体新書の発行であろう。解体新書が広く読まれることにより人体解剖（腑わけ）が各地で行われることになる。さらに蘭学も盛んになりオランダ語の翻訳本が数多く出版され、オランダ語を理解する学者や医者が増加するのである。そんな状況の下にシーボルトが来日し、耳学問だけだった蘭方医に生の西洋医学の技術を教えた。それが明治維新後の西洋医学の導入を容易にしたのである。

そもそも解体新書はドイツ人医師のヨハン・アダム・クルムスの「Anatomische Tabellen」のオランダ語訳である『ターヘルアナトミア』を訳したものである。この翻訳に携わったのが杉田玄白、前野良沢、中川淳庵の三人である。そのきっかけは明和8（1771）年、江戸北郊の小塚原刑場（現在の荒川区南千住）で行われた青茶婆とあだ名を持つ女の刑死体の解剖を見学したことである。三人はその日携帯した『ターヘルアナトミア』の挿絵が実際の解剖体と寸分も違わぬことに感動し、この本を翻訳して世に出すことを決意したのである。

オランダ語に最も造詣が深かった良沢が大分の中津藩の藩医であったことから、中津藩中屋敷（現在の聖路加病院の近く）に集まり翻訳作業を始める。その作業は困難を極めるが、マネージャー的な立場で意欲的に事業を進めた玄白の努力で3年後の安永3（1774）年『解体新書』が世に出る。

ところが、不思議なことに翻訳の中心となったはずの良沢の名前は、発行者の中に入っていない。

実は、完璧な翻訳を目指した良沢と、不完全で

も早く世に出したかった玄白の考えの違いから良沢は自分の名前を入れることに同意しなかったのではないかとされている。この辺の事情や人間模様については吉村昭の小説『冬の鷹』（新潮文庫）に詳しい。

さて、この『冬の鷹』にも書かれているが玄白は晩婚で41歳の時に最初の妻登恵を迎えた。登恵は喜連川藩士の安東家の息女で、両親を失い、叔父で家老を勤める生沼氏のもとで育ち、19歳の時に伊与国大洲藩に仕え、29歳で玄白に嫁いだ。性格が温厚、賢明で、来訪者を温かくもてなすなど内助の功を發揮したため玄白が『解体新書』の完成に専念できたと伝えられている。一男五女に恵まれるが、43歳で亡くなる。その後玄白は伊與と再婚する。一般にはあまり知られていないが解体新書の完成に喜連川藩が関係していたのである。

喜連川藩は五千石の日本一小さな大名と呼ばれる。江戸時代の大名は一万石以上の石高を持つものを差し、一万石未満は旗本である。しかし、喜連川藩は源氏の流れをくむ足利氏であり、同じ源氏の流れで征夷大将軍を名乗る徳川にとっては臣下にはできない。そのため、客分として五千石の石高を出している形をとったのである。そのため、喜連川藩は格式では御三家に次ぎ、加賀前田家など十万石以上の大大名と同格とされ、助郷とよばれる土木工事などの諸役や参勤交代も免除されていた。「御所さま」と呼ばれていたことからその格式の高さは想像できる。

現在さくら市ミュージアムで行われている「幕末・明治・大正 およの医療史」ではターヘルアナトミアの原書である「Anatomische Tabellen」（獨協医大所有）や解体新書も展示されており、玄白の妻の登恵についても詳しく取り上げている。一見の価値があるので、ぜひ見学していただきたい。また、戸村先生と私が会期中の日曜日や祝日にボランティアガイドも行うので時間のある方はぜひご来場ください。

（担当：岡 一雄）

